

グローバル都市再生における 「地域再文脈化」の可能性*

—埼玉県川口市と上海のテレビ会議を事例に—

江 田 佳 那 子

はじめに

世界全体で経済社会のグローバル化が進み、企業の海外進出による海外赴任や、就労目的、留学者が増加している。日本においても新たな外国人居住者と居住関係における新たな課題や、国際的に多様な人材を地域資源として地域活性化の戦略を作れるかどうかが地域に求められるようになってきた。

筆者は社会科学の視点を重視し地域活性化のアクション・リサーチを試みている早田ゼミナール（以下：早田ゼミ）の共同研究の事例を踏まえて、筆者個人として独自に考察した次世代の都市再生のあり方、とくにグローバル都市再生における「再文脈化」についてアクション・リサーチの手法により考察することを目的とする。

1. 問題の所在—グローバル化と価値創出—

日本においてもグローバリズムに対するローカルな文脈に関する議論は多く交わされている。小笠原 (2006)¹⁾や新津、吉原 (2006)²⁾などが顕著であるが、反グローバル化を論じたものが多い。グローバル化を契機とした「地域の再文脈化」について、とくに都市づくりとの関係から論じたものはあまりない。

地域内に単に海外の文化が多く存在する、というだけでは地域の価値創出にはつながらない。市場システムを通じて異国の強い文化をただ受容するだけでは、「『均質化』された単一の意味のシステムとしてのグローバル文化」(トムリンソン、2000、129 頁)³⁾という状態

* 社会科学総合学術院 早田宰教授の指導の下に作成された。

に近づいて行くだけだろう。どのようにすれば多様性を活かしながら、価値を創出することが可能になるだろうか。

それは、グローバリゼーションによって地域に入ってくる文化を地域のローカルコンテキストに入れ込み、さらにローカルコンテキストの側からグローバルな力を活用するアクションであるとする。このプロセスを踏めるか否かが地域性を維持し、多様性を活かしながちまちを活性化できるかどうかを左右する。

グローバル社会における地域再生のあり方やメソッドの議論は、すでにロバートソン(1997)⁴⁾が指摘していることである。江戸時代における日本の鎖国政策を経たその後の明治期からの国際社会への参入の方法について、「われわれは、日本が外来のものの中から何を受容し、何を排除すべきかについて、高度に注意深い選択を行ってきたその内在的な源泉および供給源は何であったのか、という問題を問い詰めていかなければいけない」と外来文化に対し日本が卓抜した感受性を持っていることを指摘し、さらに「新しいもっと適切な考察の形は、グローバルな戦場でその他多くの社会からさまざまな思想に選択的に適応してそれらを体系的に輸入する日本の能力が相対的に大きいことばかりでなく、ことにごく最近、日本独自のやり方で一つのグローバルな社会になることを求めていることを、その出発点として措定すべきである。」と述べている。このことから、日本は国際社会に早急に対応しなければならない中で、適切な方法で異国の文化を取捨選択し、受容しながらも、自らの文化性を保ちながら成長してきていることがうかがえる。

この日本の才能は、グローバル化が進行した現代社会における文化の受容の方法にも見いだすことができる。ロバートソンが明治期の日本に言及した「体系的に輸入する能力」というのは、現代のまちづくりにおける再文脈化にもあてはめることができるのではないだろうか。しかしながら現時点では日本においてグローバル都市再生における再文脈化の議論は多く見られない。その中で日本のグローバリズムの議論において顕著である反グローバル化ではなく、むしろ地域再生の中にグローバル化の流れを取り入れ、昇華させようという取り組みが出てくることそれ自体が日本の能力なのだと考える。これが西洋諸国であればなおさら起こりにくい議論なのではないだろうか。

2. 研究の方法

(1) アクション・リサーチによるアプローチ

本論は、埼玉県川口市西川口地区におけるアクション・リサーチを通じて、地域の再文脈化プロセスにおける対話の重要性について述べることにする。早田ゼミでは、「コ・ラボ西川口」を拠点にしたアクション・リサーチをおこなっており、それを通じた考察をおこなう。

(2) リサーチ地区の概要

埼玉県川口市は、かつてキューボラの街として知られた鋳物工場の数多く立地したまちである。近年、外国人登録者数が急上昇している。昭和 61 年では人口比の 1%にも満たなかった外国人登録者数が、平成 21 年度には 4%にまで上昇している。とくに西川口地域は、外国人が多く、街区によっては 20%近くとなる。国際色豊かな都市として知られているが、いかにして地域の価値創出に活用するかが市の課題となっている。

西川口地域は、産業都市の歓楽街として発展した。一時期、風俗の街としての側面が強くなったが、2006 年から違法風俗店の一斉摘発が始まり翌 2007 年には違法風俗店は西川口に存在しなくなった。その一方で、経済はダメージを受け、かつては街の活気を失った。長期的なまちの活性化のための明確なビジョンは模索する状況が続いている。

その動きの中で、地元経営者と大学とが連携し、2009 年 9 月に「コ・ラボ西川口」というまちづくりの社会実験拠点をオープンさせた。コ・ラボ西川口の開設および詳細については、野口 (2010)⁵⁾に詳しい。

(3) リサーチ方法—テレビ会議によるワークショップを通じて—

実験主体は、早稲田大学早田研究室である⁶⁾。通信日時は、2009 年 9 月 5 日で、使用システムは、skype とし、通信は、埼玉県川口市のコ・ラボ西川口と中国上海市の復旦大学の間でおこなった。テーマは、地域資源を掘り起こし、価値創出（輸出可能なもの）を探す、とした。

3. ワークショップの詳細

(1) ワークショップの概要

日本埼玉と中国上海において話題となっているご当地の食品を相互に事前に送付し、相互にテレビ会議で品評することとした。プログラムの詳細は以下である。

まず、イベントの数日前、日本からは川口に工場のある菓子と中国にはない日本ならではの菓子を送り、反対に上海からは中国で良く知られているが未だ日本に入ってきていない菓子を選んで送ってもらった。

当日は、コ・ラボ西川口の関係者、行政職員を始め、自治会の婦人部の方にも集まっていたが、川口側は 30 名ほどが 130 インチスクリーンを前に座ってもらった（図 1）。

上海では、復旦大学の学生が 5 名にパソコンの前に座ってもらった（図 2）。

川口側では留学生が通訳としてサポートをし、中国語でのやり取りができるようにした（図 3）。

中国および日本双方で、参加者が多数のため、表と裏に○と×を書いた小旗を用意し、



図1 ワークショップに参加した
地域住民と学生

出所：筆者撮影



図2 テレビ会議画面の復旦大学の学生

出所：早田ゼミナール石塚高秋撮影



図3 通訳する中国からの留学生

出所：早田ゼミナール石塚高秋撮影



図4 旗揚げワークショップに参加した
行政職員、地域住民

出所：早田ゼミナール石塚高秋撮影

順番に菓子を食べながら美味しいかどうかを伝えることとした（図4）。

全10種類の菓子のそれぞれを美味しいと感じた人の数を集計し、結果を双方へ伝えた。最終的に集計された数で順位をつけていった。地域の一部の人々に限定されるが、このようにして決定された味の順位は、地域の価値観をおおむね反映しうると考えた。

(2) プログラムの詳細

「コ・ラボ西川口」のオープニングの目玉として行われたプログラムであり、開会式後の休憩をはさみ、12時30分から約40分間行われた。上海との回線が繋がっていたのはそのうち約30分間である。

プログラムの次第は以下のとおりである。

1. ワークショップの主旨説明

2. 菓子の解説——試食タイム

3. 順位の集計

4. 上海との意見交換——日本の菓子、中国の菓子に対する感想

当日はプログラムの時間の都合上、あらかじめ菓子を食べ、川口側の意見は集計することとした。また、個人にあらかじめ配られた旗を使用し、美味しいか否かを○か×で意思表示してもらった。意思決定は数を集計する多数決方式を採用した。

日本から送った菓子、中国側から送っていただいた菓子は以下の表1のとおりである。中国からの菓子は商品名を日本語に翻訳し、わかりにくいものには解説をつけた。

(3) ワークショップの結果

まず、日本から送った商品については、総じて美味しいと好評であった。その一方で、川口の名産であるクッキー（表1-①）については、中国で販売するには値段が高いため難しいのではないか、という意見であった。また、川口の会場の参加者からの感想として、「個人的に②は美味しくないと感じたため最下位ではないか」という意見が出されるなど、活発な意見交換が行われた（表2）。

表から読み取れるように、日本側、中国側で支持される菓子に大差はなく、共通性が高いことがわかった。ただし、スルメイカは栄養があるためダイエットには効果的ということで中国では食されている等、食品を取り巻く文化的背景には相違があるということもわかった。

今回は菓子を媒介として互いの味覚にどのような違いがあるのか、そしてどのような商品が人気なのかということを確認する段階まで議論することに成功した。

4. 事例からの考察——グローバル対話のあり方——

上海とのワークショップの事例をふまえ、グローバル対話のあり方について、再度分類して考察した。

(1) 分類と考察

今回のワークショップは三つの意味をもつ。

一つ目は、ワークショップで行われるような直接対話である。コ・ラボに集まった人々が行っている対話を指す。

二つ目はバーチャル対面対話である。復旦大学の学生とコ・ラボの間で行われた対話を指す。

三つ目は海外との直接対話である。こちらは自ら海外に出向いて行う直接対話と、日本

表1 ワークショップで相互に交換した菓子リスト

日本から送ったもの
①すいーつばたけ クッキー
②カントリーマアム マンゴープリン味
③ブリッツ 限定塩味
中国から送ってもらったもの
①月餅 モカ味
②干し豆腐
③干しコーン
④椰子飴
⑤梅干し すうすうな味
⑥キグチ
⑦スルメイカの糸
⑧干しサクランボ
⑨カシューナッツ 表面が甘くコーティングされたもの
⑩サンザシ しょっぱい味

出所：筆者作成

表2 ワークショップによる議論の結果

日本		中国	
順位	商品名	順位	商品名
1	⑨カシューナッツ	1	⑨カシューナッツ
2	③干しコーン	2	⑦スルメイカの糸
3	⑦スルメイカの糸	3	③干しコーン
3	⑧干しサクランボ	3	⑧干しサクランボ
4	②干し豆腐		
10	⑩サンザシ しょっぱい味	10	⑩サンザシ しょっぱい味

出所：筆者作成

に住む外国人居住者との対話の二つに分類して考察する。

(2) ワークショップの成果と意義

上海とネットを通じて対話ができたと、コ・ラボという場に集まっていた人たちがそれぞれ同じものを口にし、互いの価値観を話しあうことができたのは成果であった。

その意義としては、ご当地の味でありながら、国際的にも受け入れられるもの、すなわち輸出できそうなものを消費者と消費者（C to C）のダイレクトな対話で探すことができた。商品によっては、美味しいと感じる人も、あまり美味しくないと感じる人もいたが、

ほぼ全員が一致で美味しいと感じるものがあった。グローバルな価値創出の第1歩になったのではないかと考える。

今回は、地域の意思決定をするうえで多数決を採用した。本来は、個人の直感に頼る意思決定がそのまま地域の意思決定となるのは避けるべきで、より対話が重視されるべきである。時間的制約があるため、今回はこのような形で意見を集約することとなったが、ワークショップにおける意思決定が地域の価値観として認められる際には、個人の意見を互いにすり合わせていくというプロセスが重要である。細かい点で会場からの個人の意見と、全体の意見が異なっているケースもあったことから、なぜこのような結果になったのかをより詳細に究明する必要もある。このことは次回に向けた課題である。

(3) ワークショップで行われる直接対話

ワークショップで行われる直接対話とは、対話だけでは完結せず、動作を伴うものである。確かに会話のみで完結する対話であれば、通信技術を用いて対話を行うことが可能であり、同じ場所に存在せずとも双方の合意を得ることも可能となる。しかし、今回のように同じ時間に、同じものを食すのであるが、まだ対象が日本の市場に出回っていない食品である場合には、それぞれが同じものを用意することは困難である。また、今回のように順位をつける、という意思決定プロセスにおいて、一堂に会しているのか否かが個人の意思決定に影響を与えることも考慮すべきだろう。だからこそ、コ・ラボという場所に人が集まり、直接対話をするに価値があったということが言えるのである。今回のイベントのようなワークショップだけでなく、まちづくりにおいてはワークショップという形式が多く取られる。決められた時間に多様な人々が集まるのは非常に困難を極めるため、どうしても参加者の属性の多様性を保つことが難しい。ただ、既に述べたように、ワークショップにおける直接対話は情報通信技術によっても代替が難しいため、優先的にワークショップにおける直接対話が可能になるような社会システムの変革が求められる。それほどワークショップにおける直接対話が持つ意義というのは大きい。

(4) パーチャル対面对話

川口市のようにグローバル化の影響を受けている都市において、改めて海外と繋がることはどのような価値を持つのだろうか。それは、誰と海外を繋ぐか、という部分であると考えられる。グローバル化が進み、多くの外国人居住者が同じ都市の中に暮らしているとはいえ、どれだけの人数の外国人居住者と関わるかは限界がある。特に国際交流に積極的に関わっている人であれば、多くの外国人居住者と関わる機会があるが、そうでない場合には関わる機会はあまりないのである。つまり、今回のテレビ会議の例では、日ごろあまり海外と繋がる機会の少ない人たちに焦点を当てて、意見交換に参加していただいたとこ

ろに大きな意義があったと考えられる。このようにして得られた海外との対話の中で見つけられた共通項や相違点から、川口という場所の地域性を獲得するきっかけを得られたことから、海外との対話もまちづくり活動においては価値を持つと言える。

(5) 海外との直接対話

海外との対話の中で直接対話には二種類の可能性がある。一つは日本に住む外国人居住者との対話、もう一つは海外に自ら赴いて行う現地の人との対話である。まちづくりの点からみれば、海外に市民グループと一緒に向かうには限界がある。さらに言えば、異文化理解が目的ではなく、むしろ異文化をそのまま認めた上での地域性の発見にこそ意味があり、目的である。そのことから後者の直接対話は異文化理解には効果的ではあるが、まちづくり活動においては負担が大きすぎる。そのため、前者の外国人居住者との対話がまちづくり活動においては最適かつ可能性のある直接対話の形であると言える。直接対話の価値はバーチャル対話では補完することはできないため、まちづくり活動において特別な意味を持つ。特に外国人居住者の割合が多い西川口地区では、この対話の形による意見交換が望める。

上海とのテレビ会議において用いられた二つの対話の形は、地域内での個人の価値観の違いを体感し、意見を集約するという役割、そして海外との間で互いの価値観の相違を確認すると同時に地域に活かすことのできる素材を得る役割を持っている。特に海外との対話から、さらに地域内で対話を持つことができれば、海外との対話で得られたものを地域の共通認識とする機会となる。この対話のプロセスは、地域の脱文脈化、そして再文脈化と言いかえることができるだろう。

上海の事例においてももっとも美味しいとされた菓子は、カシューナッツの表面が甘くコーティングされている商品であった。つまり既に日本に存在している「カシューナッツ」の既成概念から離れ、中国の味と出会ったことになる。さらに、中国でも非常に人気のある菓子であるということが対話の中でわかることで、川口側には上海の最も人気のある味として記憶される。そして、会場一致で美味しいと感じていたことから、それはこのイベントに集まった川口側の新たな「カシューナッツ」の位置づけを獲得したこととなる。さらに言えば、ここで川口ならではの原料仕入れ、調味料、その糖度などをどうしたらよいのか、という対話の場を持つことができれば、地域のローカルコンテキストに組み込まれることになる。このプロセスこそ、脱文脈化、再文脈化であると言える。そして、このプロセスにおいて、味覚だけでは知ることのできない情報を交換できるのは対話であり、互いに同じものを美味しく感じるという体験と同時に対話からそれぞれの意見の一致を知ることができる。つまり、対話によって脱文脈化、再文脈化のプロセスは促進されているのである。

まとめにかえて―地域性を活かしたグローバル価値創出まちづくり―

グローバル社会における「価値創出」の取り組みは、既に情報通信技術を用いたバーチャル次元では行われている。しかし、既に述べたように、バーチャル対面対話ではワークショップで行われる対話を行うことが難しい。そのため、情報通信技術のみに頼った価値創出と、地域再生によって行われる価値創出は異なった結論になる傾向をもつ。バーチャルにおける価値創出の手法を用いただけでは、地域のローカルコンテキストに根付いた価値創出は不可能である。この関係を調整しながら、地域に根差した価値創出をめざすこと、それにより空間的なまちづくりの可能性を拡大することが重要である。このようなアプローチが、まちづくり活動における対話、価値創出の場で今後有効になるであろう⁷⁾。

川口市の地域性を活かしながら、新しいグルメを生み出す。それと同時に輸出可能な商品を生み出すことにもなる。そこでキーワードとなるのがグローバルとローカルの出会いである。素材の中に川口で採れるものを入れたグローバルな味のもの、あるいは川口ならではの食べ物にグローバルな素材を入れる、というどちらを選んでも構わない。しかし、その決定プロセスには必ず二つの対話を入れ込む、ということがグローバル・ヴィレッジを目指す市の地域再生には求められるだろう⁸⁾。

グローバルとローカルの出会いとは、言い換えればローカルコンテキストの中から出てきた素材をグローバルな価値観と出会わせることによって脱文脈化し、それをワークショップにおける直接対話によって再文脈化するプロセスである。その際にもグローバルな味を我々の持っている既存イメージに合わせるのではなく、海外との対話によってすり合わせていくことで、ユニバーサルな味を楽しめる街としての川口の価値を確立できるようになる。これからの地域再生にはローカルコンテキストを踏まえた上で、グローバルな価値とも繋がるのが絶対条件となる。このプロセスによって生まれたグルメは結果的に低価格な身近なものとなる可能性を持っている。川口市には脱文脈化、対話による再文脈化による地域再生の土壌が形成されている。

この取り組みは現在進行中のプロジェクトによって、確立されつつある。こうした動きにおける早稲田大学と学生の力も見逃すことはできない。アクション・リサーチによる地域コンテキストの情報量は豊富である。しかし、それだけでは、価値創出には結びつき難い。海外との対話という脱文脈化の作業、そして再文脈化をファシリテートは、外部者ならではの強みであると同時に、大学の持つ海外とのネットワークや技術に頼る部分が大きい。また、学生はこの経験に触れることで、単純な地域づくりの支援者としての役割ではなく、それぞれの存在の可能性を最大限に活かしながら学ぶことができるのである。このように学生の学びと地域再生の複合的なメソッドが両輪で確立されていったことは、この事例における最大の特徴であったと言える。

こうした再文脈化のプロセスを踏まえた地域再生のプロジェクトをしっかりとした形にすることが現在の課題であり、一つの方法論として確立することが今後も期待される。

謝辞

この研究は、早稲田大学社会科学部早田ゼミナールの川口共同研究の成果をベースに筆者が独自に論考したものである。お世話になった川口市の地域住民の方、および早田宰（早稲田大学教授）、陳雲（復旦大学副教授）、橘麻由、李曉婷（以上早稲田大学大学院）、石塚高秋、野口琢生、四ノ宮紀昭、竹内さやか、高木真唯美、米野あゆみ、奥西耕輔（以上早稲田大学）、陳元元（明治大学）の氏名を記して感謝に代える。

注

- 1) 小笠原泰、なんとなく、日本人—世界に通用する強さの秘密、PHP 研究所、2006
- 2) 新津晃一、吉原直樹、グローバル化とアジア社会—ポストコロニアルの地平、東信堂、2006
- 3) ジョン・トムリンソン、グローバリゼーション 文化帝国主義を超えて、青土社、2000
- 4) ローランド・ロバートソン、グローバリゼーション：地域文化の社会理論、東京大学出版会、1997、p. 110-111
- 5) 野口琢生、「コ・ラボ西川口」開設と現在の活動、平成 21 年度商店街と大学の連携による協働体制構築事業告書、全国商店街支援センター、2010
- 6) プログラムの運営においては、早稲田大学社会科学部早田ゼミの高木真唯美、システム担当：石塚高秋、四ノ宮紀昭、通訳：李曉婷と明治大学大畑裕嗣ゼミナール陳元元の各氏に協力いただいた。
- 7) 西川口エリアでは、現在も B 級グルメの街としての活性化の方向で地域のビジョンは進んでいる。
一連の B 級グルメブームは商業化された一種の流行である。イベントを行えば人を引き付けることはできるが、日常的に人を引き付けるほどの求心力を持ちえない。ご当地名物としての一品を生み出せないかぎり、B 級グルメを語ることで自体が、まちの再生を行き詰らせてしまう原因となりかねない。
- 8) 既に新しい商品開発のプロジェクトが動き出している。それは地域のローカルコンテキストの中から発掘された「味噌」を川口のグローバル性に目をつけ、日本を代表する調味料としての既存の味噌イメージにとらわれない新しい調味料としての可能性を探る、という新商品開発プロジェクトである。

参考文献

川口市ホームページ、人口統計資料、昭和 61 年、平成 21 年